

新「言語関連事項」への視点

千葉大学

伊坂 淳一

新学習指導要領を語るとき的前提

本稿に与えられた課題は、小学校及び中学校国語の新学習指導要領における「言語」関連の扱いについてである。そのためにいま一度、新学習指導要領の総論部分に立ち返ってみたい。

小学校において平成23年度から、中学校において平成24年度から実施される新学習指導要領を支える基本的な考え方は、二〇〇八年一月十七日に公表された中央教育審議会答申である。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（以下、「改善について」）に示されている。「改善について」には、実際にさまざまな内容がまさにてんこ盛り・にされている。しかし、その中核となるコンセプトは、次ページのような図式で理解できるものと、本稿の筆者は考えている。

世間的、マスコミ的には、授業時間数の増加、学習内容の復活、総合的な学習の時間の後退、道徳教育の方向性への懸念などが取りざたされている。それらは周辺のとまではないが、新学習指導要領の中核はあくまでも、「キーコンピテンシー」―「思考力・判断力・表現力」―「言語活動の充実」というラインであると考えられる。

「言語活動の充実」は、教育内容に関する主な改善事項の筆頭にあげられており、そこでは「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。」と記されている。さらに「ここだけでなく、「改善について」の各所で取り上げられていることに加えて、「言語活動に関する学習指導要領改訂案の記述例（抜粋）」という別文書までが添付されている。また、この間の言語力育成協力者会議の開催や、文部科学省（二〇〇六）『読解

力向上に関する指導資料（PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向）』（東洋館出版社）の刊行を見ても、今後の初・中等教育において文部科学省がめざそうとしている方向は明確であると思われる。

つまり、何のための「言語活動の充実」かというと、「思考力・判断力・表現力等の育成」のためであり、国際的に通用する「キーコンピテンシー」を実現する学力を核としていくためである。それは、これからの社会が「知識基盤社会」であるとの認識と、経済協力開発機構（OECD）によるPISA調査、および全国学力・学習状況調査の「B問題」から派生してきた課題ゆえである。

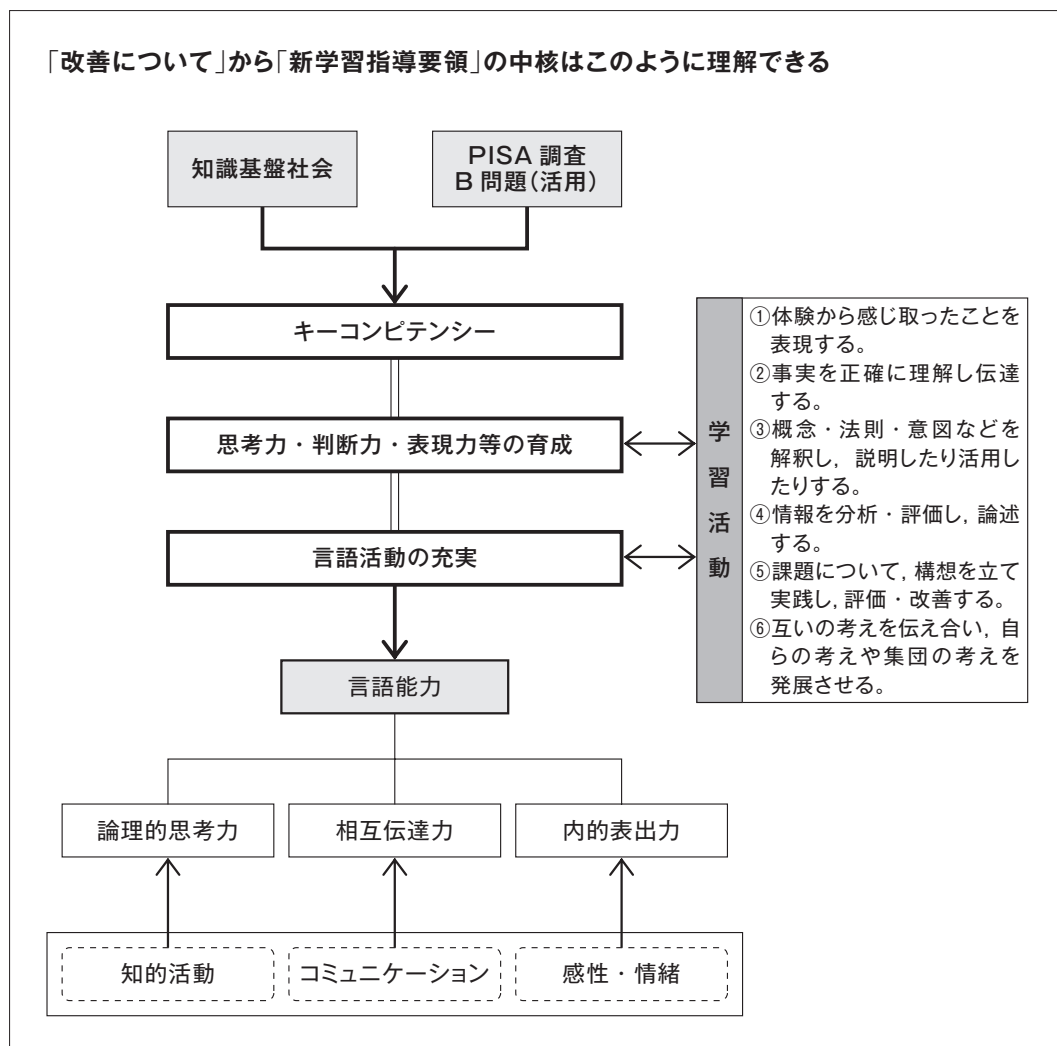
そして、言語活動の充実が求めるものは、①論理的思考力、②相互伝達力、③感性・情緒の基盤としての内的表出力であるとしている。

教科横断的な言語活動の充実を推進していく中心となるのは、なんといっても国語科である。その国語科における、「言語」に関する事項にも、全教科的な言語活動の充実を支える基盤としての役割が求められていることを確認しておく必要がある。

現「言語事項」から新「言語関連事項」へ

新学習指導要領の内容において、これまで

「改善について」から「新学習指導要領」の中核はこのように理解できる



一つといってもよいのが、「(1)ア 伝統的な言

使ってきた〔言語事項〕という事項名は、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に変わった。単なる名称の変更ではなく、内容の改訂である。

- すなわち、現行の〔言語事項〕は、
- (1) 言語の構造・機能〔仮称〕（一般に使用される狭義の「言語事項」）
 - (2) 漢字
 - (3) 書写
- という構成であったものが、新学習指導要領では、
- (1) ア 伝統的な言語文化に関する事項
イ 言葉のきまりや特徴に関する事項
ウ 文字に関する事項
書写に関する事項
 - (2)

という構成に変わった。対応関係から言えば、

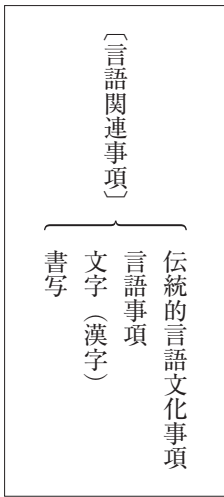
- とほぼ重なる。(1)ウは、小学校における平仮名・片仮名及びローマ字を新たに含んでいるが、実質的には、現行の「(2)漢字」には

相当する。

そして、今回の改訂における最大の変更の一つといってもよいのが、「(1)ア 伝統的な言

語文化に関する事項」の新設である。ただし、実際的には新設というより、現行で「読むこと」に位置付けられていた、いわゆる古典学習が、「読むこと」を離れてここに移動されたと見ることが出来る。当然ながら、領域を離れたのであるから、古典教材の扱い方も、変わってこなければならぬ。

なお、これらの項目名は長いので、なんらかの通称が必要と思うが、今後どう呼ぶかについてはまだ不透明である。現行の学習指導要領の用語をスライドさせて、全体を一事項としての「言語事項」と呼ぶこともできるが、「古典」と「言語事項」というくり方としてどうも落ち着かない。「言語事項」という呼称は、やはり「(1)イ言葉のきまりや特徴に関する事項」に対してがふさわしい感じがする。そこで、事項全体に対しては、「言語関連事項」というのはどうであろうか。そうすれば、次のように、すっきりと整理できるであろう。



伝統的言語文化事項の課題

今回の学習指導要領では、三領域の学習内容について、言語活動例が明示された点が特徴的である。事項に関してはそのようなことはないが、小学校の伝統的言語文化事項に関しては、実質的にそれが含まれた表示になっている場合がある。たとえば、低学年では、昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

とあるが、「昔話・神話・伝承」という素材に対して、「読み聞かせを聞く」「発表し合う」という言語活動が規定されている。このような観点から、素材と言語活動を表にまとめると、次のようになる。

学年	素材	言語活動
低学年	昔話・神話・伝承	読み聞かせ 発表
中学年	文語調の短歌・俳句 慣用句・故事成語	音読・暗唱
高学年	親しみやすい古文・漢文・近代文語文 古典についての解説	音読

今後の課題として、以下の点があげられる。
・素材の発掘

「昔話・神話・伝承」にしる、「古典についての解説」にしる、具体的な教材はこれから発掘していかなければならない。これまで高学年で扱っていた「短歌・俳句」を中学年に移行した場合に実際に何がいいのか、また、高学年に読ませる「古文・漢文・近代文語文」は何が適切なのか、などが課題である。

・学習活動の開発

「読み聞かせ」や「音読・暗唱」は、言語活動であって、学習活動は、それを含めた単元として開発していかなければならない。たとえば、「昔話の読み聞かせを聞いて、印象に残った場面を絵とことばに書いて説明する」、「慣用句・故事成語を使って自分の体験を語る」など、三領域との連携した学習活動の工夫が必要である。

中学校の伝統的言語文化事項では、従前の古典学習から、小学校での学習の継続性という側面に一歩踏み出したという感じがする。すなわち、

- ・第一学年における「古文・漢文を音読して特有のリズムを味わうこと」。
- ・第二学年における「古典を朗読して楽しむこと」。
- ・第三学年における「古典の一節を引用する

などとして、古典に関する文章を書くこと」などがそれにあたる。

課題としては、小学校と同様である。

・素材の吟味と発掘

教科書教材を中心に、中学校の古典教材は、ほぼ定番化していた。「古典の一節を引用して文章を書く」学習に適した素材は何か、だけでなく、「古典に表れたものの見方・考え方、登場人物や作者の思い」を扱う教材（第二学年）、「歴史的背景に注意して読む」教材（第三学年）には何がよいのか、などについてのもう一度検討し直すことが求められている。なお、文部科学省「中学校学習指導要領解説 国語編」（平成20年7月）では、「古典には様々な文章があることを知ること」（第一学年）に対して、「様々な種類」として、「和歌、俳諧、物語、随筆、漢文、漢詩」と並べ、「能、狂言、歌舞伎、古典落語などの古典芸能」をあげている（p.51）。これらについても、従前はじゅうぶんに手が回らなかった分野である。

・学習活動の開発

観点は小学校と同じであるが、たとえば、「古典の一節を引用して文章を書く」学習を、従前の読解の学習の最後におまけ的にするのではなく、それ自体を目的化した本格的な単元に作り上げるなどの工夫が求められる。

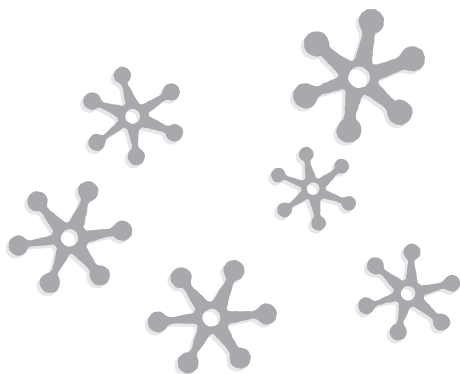
言語事項の課題

現行の中学校学習指導要領の〔言語事項〕からの大きな変更は、「声の出し方の基本的事項や段落の役割に関する事項など領域の内容に関連の深いものについては、関係する領域の内容に位置付けた」（中学校学習指導要領解説 国語編）p.15）点である。新学習指導要領は、三領域間においても、従前のような形式的扱いから柔軟な発想に転換しており、その流れを汲んでいるものと思われる。

その他の細かい変更については、「中学校学習指導要領解説 国語編」の30～31ページにまとめられている。全体としてみると、「言葉の働きや特徴、言葉遣いに関する事項」の充実に目がとまる。敬語は第二学年（敬語の働き）、第三学年（社会生活の中での適切な使用）と、二学年にわたってはりつけられている。また、「時間の経過による言葉の変化や世代間による言葉の違い」など、言語の社会性についての観点重視の意識が見られる。「話や文章の形態や展開に違いがあること」についても、「気付くこと」から「理解すること」に変わった点は、社会生活上で、相手や目的に応じた適切な表現・理解を重視する姿勢である。

今回の学習指導要領の改訂の有無にかかわ

らず、言語事項の課題は、日常の言語生活から乖離した知識中心の学習の改善にあることは、だれの目にもはっきりしていた。これからの時代に求められる学力が、キーコンピテンシーと深く関わる「思考力・判断力・表現力」であることが明確になった現在、そこからもっとも遠い位置にあるともいえる言語事項の学習を、そろそろなんとかしなければならぬ段階に来たと言える。



いさか じゅんいち 千葉大学教授。言語事項の既成概念、伝統的な学習内容・学習方法を、あえて国語学プロバターの立場から変革することを目指している。著書に『ここから始まる日本語学』（ひつじ書房）など。